ヘミングウェイ

誰がために鐘は鳴る

キリマンジャロの雪/他

大久保康雄訳

河出書房

© 1969

FOR WHOM THE BELL TOLLS

Copyright 1940 by Ernest Hemingway in U.S.A.

Published under licence from Mikasa Shobo, Tokyo,

Holder of the rights to print and publish in Japan

カラー版　世界文学全集　第30巻

ヘミングウェイ　誰がために鐘は鳴る 他

昭和 41 年 5 月 15 日初版発行
昭和 44 年 7 月 1 日再版発行

訳　者　大久保康雄
装幀者　亀倉雄策
発行者　中島隆之
印刷者　澤村嘉一
印　刷　凸版印刷株式会社
発行所　株式会社　河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の6
電話　東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座　東京 10802

定価 750 円

製　本・加藤製本株式会社
製　函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表　紙・日本クロス工業株式会社

目　次

ヘミングウェイ

誰がために鐘は鳴る……3
キリマンジャロの雪……355
フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯……375
年表……401
解説……409

巻頭口絵　猛獣狩りをするヘミングウェイ
（1953年南ケニア地方にて）
Photograph by Earl Theisen
Copyright Look Magazine

本文カラーさし絵
イーヴ・ブレイエ
M・シリイ
© 1957, 63 Librairie Gallimard

装　幀　亀倉雄策

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

誰がために鐘は鳴る

マーサ・ゲルホーンに

主要人物

ロバート・ジョーダン　スペイン風にロベルトと呼ばれるアメリカの青年。カレッジでスペイン語の講師をしていたが、スペインの内乱によって自由と正義が脅かされるのを黙視できず、義勇軍に身を投じ、ゲリラ隊をひきいて、山中の橋梁爆破に生命を賭ける。

マリア　共和派の村長を父にもったスペイン娘。暴徒のために髪を刈りとられて凌辱されるが、ジプシーの仲間に救われ、山中にかくまわれている。ロバートにひたむきな情熱をよせる。

パブロ　山中の洞窟にひそむジプシーの頭目。かつてゲリラとして活躍したが、寄る年波とともに弱気になり、わが身の安全ばかりをはかっている。ロバートと反目する。

ピラール　パブロの妻。熱烈な共和派支持者で勝気なジプシー女。すすんで銃をとりゲリラ戦に加わる。臆病風をふかすパブロを軽蔑し、夫にかわってジプシーの頭目となる。

アンセルモ　文盲の老ジプシー。ロバートの片腕となって橋梁爆破に身を挺する。

つんぼおやじ（エル・ソルド）　パブロたちの山寨の近くにいるジプシーの頭目。共和派のゲリラとして活躍。

ホアキン　つんぼおやじの配下の青年。

アグスティン　パブロの配下のひとり。命知らずのジプシー。

プリミティボ　パブロの配下。ジプシー。

フェルナンド　パブロの配下。

なんぴとも一島嶼にては
あらず　なんぴともみずか
らにして全きはなし　ひとはみな
大陸の一塊　本土のひとひら　そのひとひら
の土塊を　波のきたりて洗いゆけば　洗われし
だけ欧州の土の失せるは　さながらに岬の失せる
なり　汝が友どちや汝みずからの荘園の失せ
るなり　なんぴとのみまかりゆくもこれに似
て　みずからを殺ぐにひとし　そは
われもまた人類の一部なれば　ゆえ
に問うなかれ　誰がために
鐘は鳴るやと　そは汝が
ために鳴るなれば

ジョン・ダン

1

彼は林のなかの褐色の松葉の散りしいた上に、組みあわせた腕にあごをのせて腹ばいになっていた。頭上の高い松の梢を風が吹きわたっている。山腹は、彼がねているあたりは傾斜がゆるやかだが、そこから下はけわしくなっていて、山峡をこえて曲がりくねっているアスファルトの道路が、くろぐろと見える。道路に沿って小川が流れており、山峡のはるか下のほうの流れのほとりに製材所が見え、落下するダムの水が夏の日ざしのなかで白く光っている。

「あれがその製材所か？」と彼はきいた。

「そうでがすよ」

「記憶がないな」

「あれは、あんたがここへきてから建ったですだ。古いほうの製材所は山峡のずっと下、うんと下のほうになりますだ」

彼は写真複製の軍用地図を林の地面にひろげて、しさいに眺めた。老人が、その肩ごしにのぞきこんだ。背の低い頑固なからだつきの老人で、農夫の着る黒いスモック（上着）に、鉄みたいにごわごわした灰色のズボンをはき、縄底の靴をはいていた。山を登ってきたので息づかいが荒く、ふたりが運んできた二つの大きな荷物の一つに片手をのせて休んでいた。

「すると橋はここからは見えないわけだね」

「さよう」老人が言った。「このへんは山峡でも楽なところで、川の流れも、ゆるやかになっていましてな。下の道路が木立ちのなかに曲がりこんで見えなくなっているあたりで、川が急に落ちこんで、けわしい峡谷になっていて――」

「おぼえている」

「橋は、その峡谷にかかっていますだよ」

「それで、やつらの哨所は、どことどこにあるのかね？」

「あすこに見えるあの製材所に一つありますだ」

このあたりの地帯を調べていた若い男は、色のあせたカーキ色のフランネルのワイシャツのポケットから双眼鏡をとりだし、ハンカチでレンズをふき、接眼部をまわしていたが、やがて製材所の板が急にはっきりと映ってきた。扉のわきの木のベンチ、回転のこぎりのある差掛け小屋の背後につみあげてある山のようなおがくず、川の対岸の山腹から材木を流しこむ用水路などが見えた。眼鏡にうつる流れは、澄んで、なめらかに見え、落下する水の波紋の下で、ダムからの水の飛沫が風に吹きとんでいた。

「歩哨はひとりもいないようだな」

「煙が製材小屋からあがっているし」と老人が言った。「それに綱に服がかかっておりますぜ」

「それは見えるが、歩哨の姿は見えない」

「きっと、やっこさん、日陰にいるだよ」と老人は説明した。「あすこは、いまじぶん暑いだからね。わしらには見えねえ陰にはいりこんでいるんでがしょう」

「そうかもしれないな。つぎの哨所は、どこにあるんだ？」

「橋の下でさ。この峠から五キロくだった道路工夫の小屋にありますだよ」

「あそこには幾人くらいいるのかね？」と彼は製材所を指さした。
「兵が四人に伍長がひとりくらいなもんでがしょう」
「それで、下のほうには？」
「もっといますでしょうな。あとで、たしかめてきましょう」
「それから橋のところには？」
「いつもふたりいますだ。両端にひとりずつな」
「おれたちも若干必要だが」と彼は言った。「何人くらい集められるかね？」
「何人でも、あんたのほしいだけ集められますだよ」老人が言った。「いまは、ここの山にも大勢おりますでな」
「どれくらいいるかね？」
「百人以上いるでがしょうな。けれども、みんな小部隊にわかれていますでね。どれくらい必要なんですかい？」
「それは橋を調べた上でいうことにしよう」
「橋のほうは、いますぐ調べたいのですかね？」
「いや、さしあたっては、この爆薬をいよいよというときまでかくしておく場所へ行ってみたい。できるなら、橋から三十分以内の距離のところに、もっとも安全にかくしておきたいのだ」
「そいつはわけありませんや」と老人が言った。「わしらの目的地から、その橋までは、ずっと下り坂になっていますでな。だが、いまそこへ行きつくには、ちっとばかり馬力をかけて登らにゃならねえですよ。腹はすきなすったかね？」
「すいている」若い男は言った。「だが食事はあとまわしだ。ところで、きみは、なんという名前だったかな。忘れたよ」
忘れたというのが老人にはおもしろくなかった。
「アンセルモ」老人が言った。「アンセルモと呼ばれていましてな。バルコ・デ・アビラの人間でがすよ。その荷物、かつがしてあげましょう」

若い男は、上背があり、やせていて、日光が縞になって当たっている頭髪が美しく、風雨にきたえられた日やけした顔をして、目に色あせたフランネルのワイシャツに百姓ズボンをはき、縄底の靴をはいており、身をかがめて包みの革紐の一つに片腕を通すと、重い荷物を、ぐいと肩にほうりあげた。それから、片方の革紐にも腕を通して荷物の重みを背中に安定させた。さっきまで荷物があたっていた部分のワイシャツが、まだ汗で濡れていた。
「さあ、かついだぞ」と彼は言った。「どう行くのかね？」
「のぼるんでさ」アンセルモが言った。
荷物の重みに身をかがめ、汗をかきながら、ふたりは山腹いちめんに生いしげっている松林のなかを、しっかりした足どりでのぼって行った。踏みつけ道らしいものは、若い男には一つも見わけられなかったが、しかしふたりは骨を折ってのぼって行き、山の斜面をまわり、やがて小さな流れを渡った。老人は頑丈な足どりで、さきに立って流れの岩床の端をのぼって行った。のぼりは、いよいよけわしく、いっそう骨が折れてきたが、それでもやっと、頭上にそそり立つ、つるつるした花崗岩の岩棚の端の向こうで流れが急に落ちこんでいるらしいところへ出た。老人は、岩棚の根もとで若い男が追いついてくるのを待った。
「大丈夫だかね？」
「大丈夫だ」と若い男は言った。ひどい汗で、腿の筋肉が、けわしい傾斜をのぼってきたため、ぴくぴくけいれんしていた。
「とにかく、ここで待っててくんなさい。さきへ行って連中に注意してきますだよ。あんただって、そんな代物を背負って鉄砲弾をくらいたくはねえでしょうからね」
「冗談にもごめんだよ」と若い男は言った。「遠いのか？」
「すぐそこでさ。連中は、あんたのことを、なんと呼んでるだね？」
「ロベルトと言っている」と若い男は答えた。彼は荷物をずりおろす

と、川床の側の二つの丸石のあいだに、そっとおいた。
「それじゃ、ロベルト、ここで待っててくんなさい。すぐまたもどってきますでな」
「よし」と若い男は言った。「しかし、きみはこの道をおりて橋のところまで行くつもりか？」
「いんや。橋へ行くときにゃ、もう一つの道を行くだよ。そのほうが近くて楽だでな」
「橋からあまり遠いところへ、これをしまっておきたくはないんだがな」
「あとでわかるだよ。そこがあんたの気にいらなけりゃ、また別のところをさがすさ」
「そうしよう」と若い男が言った。
彼は荷物のそばに腰をおろして、老人が岩棚をのぼって行くのを、じっと見まもっていた。のぼりにくいところではなかった。べつだん探しもせずに手がかりを見つけて行くそのやりくちから、老人が、以前、幾度となくそこをのぼったことのあるのが、若い男にもわかった。しかも、だれがのぼったにしろ、彼らは、ひどく注意深く、なに一つ痕跡を残してはいないのだ。
若い男は、ロバート・ジョーダンという名であったが、おそろしく空腹を感じ、それに不安でもあった。飢えをおぼえたことは何度もあるが、不安を感じるというのは、ふだんないことだった。というのは、自分の身に何がふりかかるかということは、気にかけるほどのことでもなく、また、この地方一帯の敵の前線の背後で行動するのが、しごく造作のないことは、これまでの経験で知っていたからである。よい案内人さえあれば、敵の背後で行動することも、敵中を横断することも、造作のない点では同じだった。たとえ行動を困難ならしめる事態におちいったにしても、それはただ、わが身に起こった出来事にもったいをつけるだけのことだった。それだけのことで、あとはただ信頼すべき人間を選びさえすればいいのだ。いっしょに仕事をする人間を、全面的に信頼するか、それとも全然信頼しないか、いずれかにしなければならず、そして信頼するについては決断が必要だった。彼は、すこしも、そんなことに気をもんでいたのではなかった。問題は、ほかにあったのである。
アンセルモは、いい案内人だったし、山のなかを旅することにかけては、おどろくほど達者だった。ロバート・ジョーダンも歩くのは達者だったが、夜明け前から老人について歩きまわって、この男に本気で歩かれたら、こっちがくたばるとわかった。ロバート・ジョーダンは、これまでのところ、このアンセルモという人間を、万事につけて信頼していた。ただし判断力については別である。まだ老人の判断力をためしてみる機会がなかったからだが、どのみち判断は、こっちの責任になっているのだ。いや、彼が気にやんでいるのは、アンセルモに関することではなかった。また橋梁の一件にしても、他の多くの問題以上にむずかしいことではなかった。彼は、どんな種類の橋梁であろうと、指定されたものを爆破する方法を知っているし、事実また、大小さまざまの構造の橋梁を爆破してきているのである。たとえ、その橋がアンセルモの報告より二倍も大きいとしても、二個の荷物のなかには、それを見事に吹っとばすに十分な爆薬と装置一式とが用意されているのだ。というのも、その橋は、一九三三年、彼が徒歩旅行でラ・グランハへ行く途中渡ったことがあるので記憶にのこっているし、また一昨夜、エスコリアル宮の外の家の、あの二階の部屋で、ゴルツから、その橋の説明を読んできかされていたからである。
「橋を爆破すること自体は、意味のないことなのだ」頭の毛を剃りあげた傷痕のある頭の上にランプが光り、鉛筆で大地図の上を指しながら、ゴルツは言ったのである。「わかるな？」
「わかります」
「全然ばかげたことだ。ただ橋を爆破するだけでは失敗なのだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おっしゃるとおりです、閣下」

「攻撃のためにさだめられた時間にもとづいて、指示された時刻に橋を爆破するということは、いかにしてそれをやるべきかということなのだ。それは、きみにも当然わかるだろう。それが、きみの権利なのだし、爆破すべき方法なのだからね」

ゴルツは鉛筆に視線を落とし、それから、それで歯をこつこつとたたいた。

ロバート・ジョーダンは何も言わなかった。

「きみにはわかっているな、それがきみの権利であり、いかに行なうべきかということは」ゴルツは彼を見、うなずき、言葉をつづけた。ついで地図を鉛筆でたたいた。「つまりそれは、わしがいかにそれを行なうべきかということであり、またそれは、われわれが何を手に入れることができないかということなのだ」

「なぜですか、閣下？」

「なぜ？」とゴルツは憤然と言った。「きみは幾度となく攻撃を見たことがあるくせに、なぜかなどと、そのわけをわしにきくのか。わしの命令が変更されないことを保障するものはなんだ？　攻撃が取り消されないことを保障するものはなんだ？　攻撃が延期されないことを保障するものはなんだ？　開始さるべきときから六時間以内に攻撃が開始されることを保障するものはなんだ？　いったい、これまでの攻撃で予定どおりに行なわれたものがあるかね？」

「あなたの攻撃なら時間どおりに開始されますよ」とロバート・ジョーダンは言った。

「ところが、これは、わしの攻撃ではないのだ」ゴルツが言った。「なるほど攻撃を行なうのはわしだが、しかし、それはわしのものではない。砲にしても、わしのものではない。砲は、わしが要求しなければくれないのだ。彼らは、派遣すべき砲兵隊があるときでさえ、わしの要求するものを、よこしてくれたためしがない。こんなことは、ほんの一例だ。このほか、いろんなことがあるのだ。あいつらが、どんな連中か、きみも知っているだろう。いちいちあげつらう必要もないことだ。いつも何かがあるのだ。いつも、だれかが邪魔をするのだ。だからこんどは、きみも、しっかりのみこんでいてもらいたいのだ」

「すると、橋の爆破は、いつやればいいのですか？」とロバート・ジョーダンはきいた。

「攻撃開始後だ。攻撃開始の直後、それ以前ではいけない。そうすれば、増援部隊が、この道をのぼってやってこないだろうからね」彼は鉛筆で指した。「なにものにも、この道をのぼってこさせてはならぬのだ」

「それで、攻撃はいつですか？」

「それは、いずれ教える。だが、その日時は、ただ攻撃の可能性を示すものとして利用してもらいたい。そのときにそなえて準備してもらわなければならぬ。攻撃が開始されてから、きみは橋を爆破するのだ。いいかね」彼は鉛筆で指し示した。「やつらが増援部隊をもってこられるのは、この道しかない。やつらが戦車や砲を運びあげることができるのも、あるいはトラックを山ごえの間道に動かすことができるのも、この道しかない。わしは、その間道を攻撃するのだ。わしは橋が吹っとんでしまっていることを知らなければならぬ。攻撃の前では、だめだ。前にやったのでは、攻撃が延期された場合、修理ができる。絶対に前ではいかん。攻撃がはじまったときに爆破しなければならぬ。そして、橋のなくなったことが、わしに、はっきりしていなければならぬ。いま哨兵は、ふたりしかいない。きみといっしょに行く男は、ちょうどそこからきたばかりの人間だ。なかなか頼もしいやつだそうだ。いずれ、きみにもわかるだろう。その男は山のなかに仲間をもっている。きみが必要とするだけの人数をとりたまえ。人数は、できるだけすくなく、しかし必要なだけ十分使ってもらいたい。こん

なことを、きみにくどくどいうにもおよばぬだろうが」
「そこで、攻撃の開始されたことを、わたしはどうして判断すればよろしいのですか？」
「攻撃は全師団を動員して行なわれる予定だ。準備行動として、まず空爆をやる。きみは、まさかつんぼではあるまい？」
「では飛行機が爆弾を投下したら攻撃が開始されたものと考えてよろしいのですね？」
「いつもそうだと考えてもらっては困る」とゴルツは言い、首を横にふった。「だが、こんどの場合は、そう考えてよろしい。それがわしの攻撃だ」
「わかりました」とロバート・ジョーダンは言った。「どうも、あまり好ましい仕事ではなさそうですが」
「わしだってそうだよ。手を出したくなかったら、いまのうちに、そう言ってもらいたい。手に負えぬと思うんなら、いまのうちに、そう言ってもらいたい」
「やります」ロバート・ジョーダンは言った。「りっぱにやりとげます」
「わしにとって何より肝心なのは知ることだ」ゴルツが言った。「つまり、何ものをも、あの橋を渡らせてはならないのだ。これは絶対に大切なことだ」
「わかりました」
「わしは人に、こんなことを、こんなふうに頼むのは好まぬ」とゴルツは言葉をつづける。「きみに、これをやれと命令することが、わしにはできなかった。きみが、いやでも、わしのさだめたこういう条件をやりぬかなければならぬことになるかもしれぬ、ということはわかる。わしは、きみに納得がいくように、そして、あらゆる可能な困難や重要性がのみこめるようにと、きわめて慎重に説明しているのだ」
「それで、もしあの橋が爆破されたら、あなたは、どんなふうにして、ラ・グランハへ前進するのですか？」
「われわれは、あの山ごえの間道を総攻撃してから、橋を修理する準備をととのえて前進する。これは、きわめて複雑にして見事な作戦なのだ。従来のにくらべて、まさるとも劣らぬほど複雑にして見事な作戦なのだよ。作戦計画はマドリードでたてられたのだ。これは、あの世に出ぬ教授ビセンテ・ロホの傑作のなかの、いま一つの傑作なのだ。わしがその攻撃を起こすのだが、例によって不足の兵力でやるわけだ。だが、それにもかかわらず、これはきわめて可能性のある作戦なのだ。この作戦については、わしは、いつもよりも非常に楽しみにしている。あの橋が爆破されれば作戦は成功する。セゴビアを占領できるのだ。見たまえ、どういうふうにやるかを教えてあげよう。いいかね、われわれが攻撃するのは間道の頂上ではない。ここを確保してしまうのだ。ずっと向こうだよ。ほら――ここだ――こんなふうに――」
「いや、かえって、うかがわないほうがよさそうです」ロバート・ジョーダンは言った。
「なるほど」ゴルツは言った。「向こう側へかついで行くにしても、たいした荷物にもならんと思うがね」
「いつもわたしは、作戦のことは、むしろ知りたくないのです。そうすれば、たとえどんなことが起こっても、わたしがとやかく言われることはありませんからね」
「それは、かえって知らないほうがいいさ」ゴルツは鉛筆で額をなでた。「わしのほうが何倍か知りたくない気持ちだよ。だが、きみは、橋のことについて知っていなければならぬことだけは心得ているだろうな？」
「それは知っています」
「わかってくれているものと、わしは信じる」ゴルツが言った。「わ

しは、きみに向かってお談義をするつもりは、すこしもない。まあ一杯やろうじゃないか。やたらとしゃべったので、のどがからからだよ、同志ホルダン。きみの名前はスペイン語でよぶと変わっているな、同志ホルダウン」

「あなたのゴルツは、スペイン語では、どう発音するのですか、閣下？」

「ホッツェだ」と、ゴルツは、にやにやしながら、まるでひどい風邪で咳きこんでいるかのように、のどの奥のほうで声を出した。「ホッツェ」と彼は、のど声で言った。「同志ホッツェ将軍だ。スペイン語でゴルツをどう発音するか、前からわかっておったら、ここの戦争にくるまえに、もっといい名前を選びだしていただろうがね。師団の指揮をとるようになって、なんでも自分の好きな名前をつけられると思うときになって、よりによってホッツェではね。ホッツェ将軍か。いまではもう変えたいにも手おくれさ。バルチザンの仕事を、きみはどう思うかね？」バルチザンというのは、前線後方のゲリラ作戦をあらわすロシア語である。

「非常に気にいっていますよ」とロバート・ジョーダンは言って、にやにや笑った。「戸外の空気のなかで、すこぶる健康的です」

「わしも、きみの年ごろには非常に好きだった」とゴルツが言った。「みんなの話だと、きみは橋梁爆破の名人だそうだね。非常に科学的にやるというじゃないか。こいつは単にうわさだがね。きみの仕事ぶりを、まだ一度もこの目で見たことがないのでね。もしかしたら、まだ実際には何もやっていないのじゃないのか。きみは、ほんとうに爆破するのかね？」こんどは、からかう調子になっていた。「こいつを一杯やりたまえ」彼はスペイン産ブランデーのグラスをロバート・ジョーダンに渡した。「ほんとうにきみはやるのかね、橋梁爆破を？」

「ときたまね」

「こんどの橋では、ときたまなんてことは、願いさげにしたほうがいいだろうな。いや、あの橋のことをいうのはよそう。あの橋のことは、もうきみには十分わかっている。われわれは、まったく真剣なのだ。だから、とんだひどい冗談もとばせるというわけさ。ところで、戦線のあちら側には女の子がたくさんいるかね？」

「いや、女の子と遊ぶひまなんかありませんよ」

「そういう考えかたは、どうかと思うね。軍務が不規則になればなるほど、生活も不規則になるものだ。きみの仕事は、ひどく不規則だ。それに、きみは散髪の必要があるようだな」

「自分の散髪は必要に応じてやります」とロバート・ジョーダンは言った。頭をゴルツのように剃られるのではたまらないと思ったのであろう。「女の子がいなくても、わたしには、いろいろと考えることがありますよ」と彼は、ふきげんな顔をして言った。

「わたしはどういう制服を着ればいいのですか？」とロバート・ジョーダンはきいた。

「制服なんかいらんよ」ゴルツが言った。「きみの散髪も、どうだっていい。からかっただけさ。きみという男は、わしとは、だいぶちがっているようだな」ゴルツはそう言って、また二つのグラスに酒をなみなみとついだ。

「きみは決して女のことだけを考えてはいない。わしは、女のことは、これっぱかりも考えぬ。考えるわけがないじゃないか。わしはソヴィエティク（革命派）の将軍だものな。絶対に考えんよ。わしを罠にかけて考えさせてみようなどとしてくれるなよ」

いすに腰かけ、製図板の上の地図にかがみこんで仕事をしていた幕僚のひとりが、彼に向かって何かどなった。ロバート・ジョーダンにはわからない言葉だった。

「黙れ」とゴルツは英語で言った。「わしは、よたをとばしたかったら勝手にとばす。わしは非常に真剣なのだ。だから冗談もいえるんじゃないか。さあ、こいつをあけて、それから出かけたまえ。わかっただ

ろうな？」
「はい」とロバート・ジョーダンは言った。「わかりました」
ふたりは握手をかわした。彼は一礼して外へ出て、参謀用の自動車のところへ行った。自動車のなかでは例の老人が居眠りをしながら待っていた。その車で彼らはグァダラーマをすぎる道路をとばして行った。老人はまだ眠りこんでいた。ナバセラーダ街道をのぼり、アルバイン・クラブの小屋に乗りつけ、そこで彼ロバート・ジョーダンも三時間ほど睡眠をとり、それから出発したのであった。
彼がゴルツと会ったのは、それが最後だった。決して日やけすることのない異様なほど白い顔、鷲のような目、大きな鼻、薄いくちびる、横じわと傷痕のある坊主頭の男だった。明日の晩は、彼らはエスコリアル宮の外のまっ暗闇の街道を進軍しているだろう。闇夜のなかに、歩兵をのせたトラックの長蛇の列、重い装備をしてトラックによじのぼる兵隊、トラックに機関銃をかつぎあげる機関銃隊、戦車運搬用の車体の長いトラックの上へ渡し板を使って運びこまれる戦車、山ごえの間道攻撃に向かって闇夜をついて出動する師団。そんなことは考えまい。そんなことは彼のあずかり知らぬことだ。それはゴルツのやるべき仕事だ。彼のやるべきことは、ただ一つしかない。それをこそ彼は考えるべきだし、そのことをはっきりと考えぬいて、あとは、なにごともなりゆきにまかせるべきであって、気をもんではいけないのだ。気をもむのは恐怖をもつのと同じくらい愚劣なことだ。それは、ものごとを、いっそうむずかしくするのが落ちだ。
彼はいま流れのそばに腰をおろして、岩間をながれる清らかな水の流れるさまをみつめていた。流れの向こうにミズタガラシの深い茂みがあるのに気がついた。流れをわたり、両手いっぱいそれを摘みとると、泥だらけの根を流れできれいに洗って、また荷物のそばにすわりこみ、そのきれいな冷たい青葉や、歯切れのいい、ぴりぴり辛い味のする茎をかじった。流れのふちに膝を落とし、自動拳銃を革帯の上でくるりと腰の背部まで押しやって水に濡れないようにしてから、二つの漂石に両手をかけてからだをこごめ、流れに口をつけて水を飲んだ。水は痛いように冷たかった。
両手でからだを起こして横を向くと、老人が岩礁をおりてくるのが見えた。老人といっしょに、もうひとりいたが、その男も、この地方ではまるで制服のようになっている農夫の着る黒いスモックに暗灰色のズボンをはき、縄底の靴をはいて、背に騎兵銃をかついでいた。男は無帽だった。ふたりとも、まるで山羊のように岩をはいおりてくる。
ふたりがそばへくると、ロバート・ジョーダンは立ちあがった。「サルード・カマラーダ（こんにちは、同志）」と彼は銃をかついだ男に言って微笑した。
「こんにちは」と相手は気のすすまぬ調子で答えた。ロバート・ジョーダンは、短く頭髪を刈りこんだ濃いひげ面を眺めた。顔は、ほとんどまんまるで、頭もまるくて肩にめりこんでいるようだ。目は小さくて、目と目の間隔がやけに広く、耳も小さくて、頭のすぐそばにくっついている。身長は、かれこれ五フィート十インチ、大きなからだで、手足も大きい。鼻はつぶれていて、口の片すみが切れており、顔いちめんのひげの密生のなかから、一条の傷痕が、上くちびるから下あごにかけて見えている。
老人は、この男に向かってうなずき、ちょっと笑った。
「このひとは、この土地のボスでがすよ」と言って、にやにや笑い、それから、まるで力こぶを出して見せるかのように両腕を曲げて、銃をかついだ男を、半ばからかうような賞讃的な表情で眺めた。「おそろしく強いですぜ」
「いわれなくてもわかるよ」とロバート・ジョーダンは言って、また微笑した。彼は、この男の人相が気にくわなかった。だから肚のなかでは、すこしも微笑なんぞしていなかったのだ。

「おまえさんが本人であることを証明するものを何かもっていなさるかね？」騎兵銃をもった男がたずねた。
ロバート・ジョーダンはポケットの蓋をとめる安全ピンをはずし、フランネルのワイシャツの左の胸ポケットから折りたたんだ紙片を取りだして、それを男にわたした。男は、それを開いて、うさんくさそうに眺め、手のなかで、ひっくりかえした。
そうか、こいつは字が読めないのだな、とロバート・ジョーダンは気がついた。
「証印を見てくれ」と彼は言った。
老人が証印を指さすと、銃をもった男は、指のなかで紙をまわしながら、あらためていた。
「これは、なんの証印かね？」
「一度も見たことがないのか？」
「ない」
「二つあるだろう」ロバート・ジョーダンは言った。「一つは特務機関の頭文字のＳＩＭだ。もう一つは参謀本部の証印だ」
「うん、この証印なら、前にも見たことがあるだ。しかし、ここじゃ、わし以外に指揮者はいねえだ」相手は、ふきげんに言った。「その荷物は、なんだね？」
「ダイナマイトだよ」と老人が得意げに言った。「昨夜わしらは闇のなかを戦線を越えて一日がかりでこのダイナマイトを山の上までかついできただ」
「ダイナマイトなら使えるだな」銃をもった男が言った。そして紙片をロバート・ジョーダンに返して、しげしげと彼を眺めた。「さよう、ダイナマイトなら使い道があるだ。おまえさん、どのくらいもってきてくれただね？」
「きみのために持ってきたダイナマイトではない」ロバート・ジョーダンは静かに言った。「このダイナマイトは別に用途があるのだ。きみの名前は、なんというのかね？」
「それがおまえさんに、なんだというだね？」
「このひとはパブロっていいますだよ」老人が言った。銃をもった男は、ふたりを、ふきげんそうに眺めた。
「そうか。ぼくも、きみのいい評判は、いろいろと聞いているよ」ロバート・ジョーダンは言った。
「わしのどういうことをですかい？」パブロがきいた。
「いろいろと耳にしている。きみが優秀なゲリラ戦の指導者だということや、共和政府に忠誠で、各種の行動を通じてその忠誠を証明していることや、また、きみがまじめで勇敢なひとだということなどもね。参謀本部から、きみによろしくといわれてきたよ」
「そんなことを、どこで聞いたのだね？」とパブロはたずねた。ロバート・ジョーダンは、けっしてお世辞などを言っているのではないという表情を顔にあらわした。
「プートラーゴからエスコリアルへかけての評判を聞いてきたのだ」と彼は戦線のこちら側の地方一帯の名をあげて言った。
「プートラーゴにもエスコリアルにも、わしの知ったものは、ひとりもいねえはずだがな」とパブロが言った。
「しかし、山の向こう側には、以前そこにいなかった人たちが、いまは大勢いる。きみは、どこの出かね？」
「アビラだ。おまえさんはダイナマイトで何をやらかそうというんですかい？」
「橋の爆破だ」
「どの橋だね？」
「それはぼくの仕事だ」
「もしこの地域内だったら、そいつはわしの領分だね。おまえさんだって、自分の住んでるところのすぐそばの橋を爆破することはできねえでしょうが。住む場所がどこかにあって、別のところで作戦行動を

するというんでなくては、話の筋が通らねえだ。わしは、わしの仕事を知ってるだ。一年もたって、いまだに生命のあるやつなら、自分のやるべきことぐらい知ってるだよ」

「これはぼくの仕事だ」ロバート・ジョーダンは言った。「仕事を検討することは、いっしょにやってもいいがね。ぼくらの荷物の手伝いをしてくれる気があるかね？」

「いやだ」とパブロは言って首を振った。

老人は、むっとして男のほうに向き直り、ロバート・ジョーダンにはやっと意味のつかめる方言で、早口に、激した口調でしゃべり立てた。それはケベード（ゴメス・デ・ケベード Gómez de Quevedo（1580—1645）スペインの詩人でしんらつな社会諷刺小説『切りぬけ師の生涯』等の著者—訳注）を読んでいるのに似ていた。アンセルモの口にしているのは古いカスチリア語で、言ってみると、だいたい、つぎのような意味になる。「おぬしは、わからずやなのか。さよう、おぬしは、けだものなのか。さよう、いくそう倍もそのとおりだて。おぬしには分別があるのか。いや、これっぽっちもない。わしらは、きわめて重大な任務をおびて、おぬしに用があってきたのだ。おぬしの住居の場所を荒すことなく、おぬしの狐穴を人道の前にさらすのだ。おぬしの人民の利益の前にな。わしは、おぬしの父親のために、いろんな場合に、いろんなことをしてやった。いまでも、わしは、おぬしのことで、いろいろとつくしてやっている。その袋をかつぐがよい」

パブロは目を伏せた。

「だれだって、実際にできるやりかたにしたがって、自分にやれることを、しなければならねえだ」と老人は言った。

「おれはここで暮らしているし、作戦行動はセゴビアの向こうでやってるだ。もしおまえさんたちが、ここで騒ぎを起こせば、敵にかぎつけられて、おれたちは、この山から狩りだされてしまうだ。おれたちが、この山のなかで暮らせるのも、ひとえにそれは、ここで何事もしでかさねえからなのだ。それが狐のやりくちというものだ」

「さよう、それが、わしらが狼を必要としているときの狐のやりくちだて」アンセルモは、にがにがしげに言った。

「おれは、おまえさんよりは狼だぜ」パブロが言った。ロバート・ジョーダンには彼が袋をかつぐつもりになっているのがわかった。

「へへえ……」アンセルモは男の顔を眺めた。「なるほど、おぬしのほうが、わしよりも狼だて。このわしは六十八歳だよ」

彼は地面にぺっと唾をはいて首を振った。

「きみは、そんなに年をとっているのか？」ロバート・ジョーダンは、瞬間、うまくおさまりそうだと見てとり、さらになごやかなものにしようと思って、そう言ってみた。

「この七月で六十八になりますだよ」

「はたしておれたちが、もう一度その七月にめぐりあえるかどうか」とパブロが言った。「おまえさんの荷物は、おれが手つだってやるだ」

とロバート・ジョーダンに向かって言った。「もう一つは、じいさんにまかせるがいいだ」彼の口調は、ふきげんではなくなり、いまは、ほとんど陰気になっていた。「このじいさんは、おそろしく力持ちだでね」

「荷物は、ぼくが運ぶよ」ロバート・ジョーダンが言った。

「うんにゃ、そいつは、このもうひとりの力持ちにまかせたほうがいいですだよ」老人が言った。

「おれが持つだ」パブロが言ったが、その陰気な調子には、ロバート・ジョーダンに胸騒ぎを感じさせるほどの哀れさがあった。彼は、その哀れさにおぼえがあった。こんなところで、それにぶつかったことが、心を不安にした。

「それじゃ、その銃をよこしたまえ」と彼は言った。パブロから銃をうけとると、彼は、それを肩にかけた。ふたりは彼の先頭に立って登りはじめた。重そうに花崗岩の懸崖をつかんでからだを引きあげ、よじのぼり、その上端を越えて、森のなかの青々とした開墾地へ出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com